

度十公園林

宮沢賢治

度十はいつも繩けんじふの帯なはをしめてわらって杜もりの中や畑はたけの間をゆっくりあるいてゐるのでした。

雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く鷹たかを見付けてははねあがって手をたゞいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑ふものですから度十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方がないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横かゆわきをさも痒いやうなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑ひました。

なるほど遠くから見ると度十は口の横かわきを搔かゆいてゐるか或いは欠伸あくびでもしてゐるかのやうに見えましたが近くではもちろん笑ってゐる息の音も聞えましたし唇くちびるがピクピク動いてゐるのもわかりましたから子供らはやっぱりそれもばかにして笑ひました。

おっかさんに云いひつけられると度十は水を五百杯でも汲くみました。一日一杯畑の草もとりました。けれども度十のおっかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云いひつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで残ってゐました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、度十はいきなり田打ちをしてゐた家の人達の前に走って来て云ひました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉ろ。」

度十のおっかさんはきらきらの三本鋤を動かすのをやめてじっと度十の顔を見て云ひました。

「杉苗七百ど、どごさ植※〔#小書き平仮名、49-6〕らい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十の兄さんが云ひました。

「度十、あそごは杉植※〔#小書き平仮名、49-9〕でも成長らない処だ。それより少し田でも打って助ける。」

度十はきまり悪さうにもぢもぢして下を向いてしまひました。

すると度十のお父さんが向ふで汗を拭きながらからだを延ばして「買ってやれ、買ってやれ。度十あ今まで何一つだて頼んだごとあ無いがったもの。買ってやれ。」と云ひましたので度十のお母さんも安心したやうに笑ひました。

度十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走りました。

そして納屋から唐鋤を持ち出してぽくりぽくりと芝を起して杉苗を植ゑる穴を掘りはじめました。

度十の兄さんがあとを追って来てそれを見て云ひました。

「度十、杉あ植る時、掘らないばわがないんだぢや。明日まで待て。おれ、苗買って来てやるがら。」

度十はきまり悪さうに鋤を置きました。

次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光りひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして度十はまるでこらへ切れないうやうににこにこ笑って兄さんに教へられたやうに今度は北の方の堺から杉苗の穴を掘りはじめました。実にまっすぐに実に間隔正しくそれを掘ったのでした。度十の兄さんがそこへ一本づつ苗を植ゑて行きました。

その時野原の北側に畑を有ってゐる平二がきせるをくはへてふところ手をして寒さうに肩をすぼめてやって来ました。平二は百姓も少しはしてゐましたが実はもっと別の、人にいやがられるやうなことも仕事にしてゐました。平二は度十に云ひました。

「やい。度十、此处さ杉植るな※〔#小書き平仮名、50-11〕てやっぱり馬鹿だな。第一おらの畑あ日影にならな。」

度十は顔を赤くして何か云ひたさうにしましたが云へないでもぢもぢしました。

すると度十の兄さんが、
「平二さん、お早うがす。」と云って向ふに立ちあがりましたので平二
はぶつぶつ云ひながら又のっそり向ふへ行ってしまうしました。

その芝原へ杉を植ゑることを嘲笑^{わら}ったものは決して平二だけではあり
ませんでした。あんな処に杉など育つものでもない、底は硬い粘土なん
だ、やっぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云^をって居りました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろ^{しん}の心がまっすぐに
空の方へ延びて行きましたがもうそれからだんだん頭が円く変って七
年目も八年目もやっぱり丈が九尺ぐらゐでした。

ある朝度十が林の前に立ってゐますとひとりの百姓が冗談に云ひまし
た。

「おゝい、度十。あの杉あ枝打ちさないのか。」

「枝打ちていふのは何だい。」

「枝打ちつのは下の方の枝山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

度十は走って行って山刀を持って来ました。

そして片っぱしからぱちぱち杉の下枝を払ひはじめました。ところが
たゞ九尺の杉ですから度十は少しからだをまげて杉の木の下にくぐらな
ければなりませんでした。

夕方になったときはどの木も上の方の枝をたゞ三四本ぐらゐづつ残し
てあとはすっかり払ひ落されてゐました。

濃い緑いろの枝はいちめん^に下草を埋めその小さな林はあかるくがら
んとなってしまうしました。

度十は一ぺんにあんまりがらんとなったのでなんだか気持ちが悪くて
胸が痛いやうに思ひました。

そこへ丁度度十の兄さんが畑^{けんじふ}から帰ってやって来ましたが林を見て思
はず笑ひました。そしてぼんやり立ってゐる度十にきげんよく云ひまし
た。

「おう、枝集めべ、いゝ焚^たぎものうんと出来だ。林も立派になった
な。」

そこで度十もやっと安心して兄さんと一緒に杉の木の下にくぐって落
した枝をすっかり集めました。

下草はみじかくて奇麗でまるで仙人^ごたちが暮でもうつ処のやうに見え
ました。

ところが次の日度十は納屋で虫喰^{まめ}ひ大豆を拾ってゐましたら林の方で
それはそれは大さわぎが聞えました。

あっちでもこっちでも号令をかける声ラッパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるやうなどっと起るわらひ声、度十はびっくりしてそっちへ行ってみました。

すると^{おど}愕ろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集って一列になって歩調をそろへてその杉の木の間を行進してゐるのです。

全く杉の列はどこを通過しても並木道のやうでした。それに青い服を着たやうな杉の木の方も列を組んであるいてゐるやうに見えるのですから子供らのよろこび加減と云ったらとてもありません、みんな顔をまっ赤にしてもずのやうに叫んで杉の列の間を歩いてゐるのです。

その杉の列には、東京街道口シヤ街道それから西洋街道といふやうにずんずん名前がついて行きました。

度十もよろこんで杉のこっちにかくれながら口を大きくあいてはあはあ笑ひました。

それからはもう毎日毎日子供らが集まりました。

たゞ子供らの来ないのは雨の日でした。

その日はまっ白なやはらかな空からあめのさらさらと降る中で度十がたゞ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立ってゐました。

「度十さん。今日も林の立番だなす。」

^{みの}簑を着て通りかゝる人が笑って云ひました。その杉には^{とび}鳶色の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとほったつめたい雨のしづくがポタリポタリと垂れました。度十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立ってゐるのです。

ところがある霧のふかい朝でした。

度十は^{かやば}萱場で平二といきなり行き会ひました。

平二はまはりをよく見まはしてからまるで^{おほかみ}狼のやうないやな顔をしてどなりました。

「度十、貴さん^きどごの杉伐れ。」

「何して^なな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

度十は^{けんじふ}だまって下を向きました。平二の畑が日かげになると云ったって杉の影がたかで五寸もはひってはゐなかったのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでゐるのです。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖さうに云ひました。その^{くちびる}唇は

いまにも泣き出しさうにひきつってゐました。実にこれが虔十の一生の間のたった一つの人に対する逆らひの言^{ことば}だったのです。

ところが平二は人のいゝ虔十などにばかりにされたと思ったので急に怒り出して肩を張ったと思ふといきなり虔十の頬^{ほほ}をなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

虔十は手を頬にあてながら黙ってなぐられてゐましたがたうとうまはりがみんなまっ青に見えてよろよろしてしまひました。すると平二も少し気味が悪くなったと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまひました。

さて虔十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやっぱりその病気で死んでゐました。

ところがそんなことには一向構はず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰^{つぶ}れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に虔十の林だけはどう云ふわけかそのまゝ残って居りました。その杉もやっと一丈ぐらゐ、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建ってゐましたから子供らはその林と林の南の芝原とをいよいよ自分らの運動場の続きと思つてしまひました。

虔十のお父さんももうかみがまっ白でした。まっ白な筈^{はず}です。虔十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔のその村から出て今アメリカのある大学の教授になってゐる若い博士が十五年ぶりで故郷へ歸つて来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあつたでせう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向ふの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの虔十の林の方へ行きました。

すると若い博士は愕^{おど}ろいて何べんも眼鏡^{めがね}を直してゐましたがたうとう半分ひとりごとのやうに云ひました。

「あゝ、こゝはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却^{かへ}つて小さくなったやうだ。みんなも遊んでゐる。あゝ、あの中に

私や私の昔の友達が居ないだらうか。」

博士は俄かに気がついたやうに笑ひ顔になって校長さんに云ひました。

「こゝは今は学校の運動場ですか。」

「いゝえ。こゝはこの向ふの家の地面なのですが家の人たちが一向かまはないで子供らの集まるまゝにして置くものですから、まるで学校の附属の運動場のやうになってしまひましたが実はさうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云ふわけでしょう。」

「こゝが町になってからみんなで売れ売れと申したさうですが年よりの方がこゝは度十のたゞ一つのかたみだからいくら困っても、これをなくすることはどうしてもできないと答へるさうです。」

「ああさうさう、ありました、ありました。その度十といふ人は少し足りないと思つてゐたのです。いつでもはあはあ笑つてゐる人でした。毎日丁度この辺に立つて私らの遊ぶのを見てゐたのです。この杉もみんなその人が植ゑたのださうです。あゝ全くたれがかしくくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十力の作用は不思議です。こゝはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでしょう。こゝに度十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては。」

「これは全くお考へつきです。さうなれば子供らもどんなにしあはせか知れません。」

さてみんなその通りになりました。

芝生のまん中、子供らの林の前に

「度十公園林」と彫つた青い橄欖岩の碑が建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になったり将校になったり海の向ふに小さいながら農園を有つたりしてゐる人たちから沢山の手紙やお金^もが学校に集まつて来ました。

度十のうちの人たちはほんたうによろこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さはやかな匂^{にほひ}、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした。

そして林は度十の居た時の通り雨が降つてはすき徹る冷たい雫^{しづく}をみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新らしい奇麗な空気をさはやかにはき出すのでした。